

1. 哺乳類

《概要》

鳥取県の哺乳類相調査は他県と比較するとあまり十分ではない。しかし前回のレッドリスト選定時(2012)と比較するといくつかの進展があった。まず、打ち上げ遺体だがクジラ、イルカなどの海棲哺乳類の記録が飛躍的に増え(川上・一澤2012; 一澤ら2018), 2021年夏にはこれらの動物について鳥取県立博物館の特別展が開催されるまでになった。外来種だがこれまで県内の記録があいまいであったハクビシンの生息が明瞭となった(一澤ら2017; 國永ら2017)。また小型哺乳類について習性や行動の調査結果が蓄積されつつある(小林2013, 2014, 2017, 2018a,b; 小林・根本2016; 森本・小林2020a, b; 森本・小林2021)。

近年ますます目立ってきたのは、ツキノワグマ、ニホンジカ、イノシシなどの大型獣の個体数の増加である。ニホンジカのとくに県東部での増加は農林業的問題以上に植生(川嶋・永松2016), および昆虫・クモガタ類などへの影響が大きく、これによって絶滅が進行したり(ウスイロヒョウモンモドキ), レッドリストに新たに追加された昆虫・クモガタ類も多い。イノシシの掘り返しによる登山道, 林道の荒廃も目立つが, これが生物多様性に及ぼす影響については詳しくはわかっていない。

前回の鳥取県レッドリスト選定時に鳥取県から記録されていた哺乳類は7目18科48種(クジラ目をのぞく)だったが, コウモリ相の調査が進展して(野津2014; 小林2018a,b; 上野ら2022など)モリアブラコウモリが追加となり(上野ら2022), 現在は7目18科49種となっている。

どの種も過去の生息状況については資料が乏しいが, 県内および中国地方全体での生息状況を考慮して, 前回は25種をレッドリスト掲載種として選定していた。このうちツキノワグマは前回「準絶滅危惧」であったが, 近年個体数が増加し(2021年10月発表の「近畿保護区・東中国ツキノワグマ広域保護管理指針」によれば2020年の東中国地域個体群の推定個体数が650~1084頭)生息範囲も拡大傾向である(西信介氏私信)ことから今回は, リストからはずした。新規の追加種はゼロである。

ランク変更はキクガシラコウモリ1種である(DD→NTに変更)。本種は前回, 調査不十分のため情報不足とされたが, その後, 洞穴性コウモリを中心におこなわれた調査で, 本種が利用する廃坑や廃線トンネル, 人工洞などの劣化で生息環境が減少していると推測されたためである。

「絶滅種」の4種は, 県内の縄文遺跡から出土しているもので, 「絶滅種」の定義に絶滅年代の範囲をどこまで含めるかについては議論があるかもしれないが, いずれも民間伝承や江戸時代の古文書等での記述, あるいは明治時代の毛皮の存在などから, 近世まで生息していたと考えられるものであることから, 「絶滅」としてリストに含めている。

(小林朋道・鶴崎展巨)

■引用文献

- 一澤 圭・西 信介・山川 渉(2017)鳥取県内におけるハクビシン(ネコ目ジャコウネコ科)の確認記録(2010~2016年). 山陰自然史研究, 14: 33-35.
- 一澤 圭・太田悠造・田邊佳紀・榊山 匠・川上 靖(2018)鳥取県沿岸と周辺海域で記録された海洋動物(2014年~2017年)―鯨類, 鰭脚類, ウミガメ類, その他特筆すべき海洋動物について―. 鳥取県立博物館研究報告, 55: 9-15.
- 川上 靖・一澤 圭(2012)鳥取県沿岸と周辺海域で記録された海洋動物(2010年~2011年), および大型ヤリマンボウ. 鳥取県立博物館研究報告, 49: 13-16.
- 川嶋淳史・永松 大(2016)鳥取県東部におけるシカの採食による植生の被害状況. 山陰自然史研究, 12: 9-17.
- 小林朋道(2013)ニホンモモンガ *Pteromys momonga* 成獣による巢内同居の誘発. 鳥取県立博物館研究報告, 50: 55-59.
- 小林朋道(2014)巣箱利用から見た鳥取県芦津溪谷におけるニホンモモンガ, ヤマネ, ヒメネズミの生息場所選択性. 鳥取県立博物館研究報告, 51: 1-6.
- 小林朋道(2017)ニホンモモンガ *Pteromys momonga* によるフクロウの鳴き声に対する反応. 山陰自然史研究, 14: 17-21.
- 小林朋道(2018a)鳥取県内における洞窟性コウモリの生息状況. 鳥取県立博物館研究報告, 55: 1-7.
- 小林朋道(2018b)ユビナガコウモリおよびコテングコウモリにおけるフクロウの鳴き声の認知と忌避行動. 山陰自然史研究, 15: 1-5.
- 小林朋道・根本聡子(2016)ユビナガコウモリ *Miniopterus fliginosus* における同種・異種および自己・同種他個体の臭いによる識別. 山陰自然史研究, 12: 1-5.
- 國永尚稔・一澤 圭・西 信介(2017)鳥取県内で初めて捕獲されたハクビシン(ネコ目ジャコウネコ科)の解剖所見. 山陰自然史研究, 14: 23-26.
- 森本祈恵・小林朋道(2020a)カワネズミ *Chimarroale platycephala* における溜め糞行動の生物学的特性. 山陰自然史研究, 16: 35-44.
- 森本祈恵・小林朋道(2020b)カワネズミ *Chimarroale platycephala* は水中でスクーパータンクを利用している可能性がある. 山陰自然史研究, 16: 45-46.
- 森本祈恵・小林朋道(2021)カワネズミを見てみたい! 水にもぐる銀色の小動物の研究. くもん出版(東京). 144 pp.
- 野津幸夫(2014)大山(鳥取県)で観察したコウモリ類2種. 山陰自然史研究, 10: 29-30.
- 鶴崎展巨・岡田 純・小川弘展(2014)I. 広留野の希少種を中心とする動物相調査. pp. 3-16. 鶴崎展巨・永松 大(編)広留野地域(若桜町・八頭町)平成25年度希少野生動物植物等生息・生育状況調査報告書. 95 pp.
- 上野吉雄・畑瀬 淳・原 竜也・石井秀雄・岡田 純・岡田龍河・松田裕太・鶴崎展巨(2022)鳥取県大山のコウモリ相. 高原の自然史, 21: 51-58.

カワネズミ トガリネズミ形目トガリネズミ科
Chimarrogale platycephalus (Temminck, 1842)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)
環境省：—



広島県北広島町 (旧芸北町) 1991.9.19 / 撮影：保井 浩

■**選定理由**：局所的に分布し、個体数が少ない。堰堤やコンクリート護岸により生息地の分断や破壊が進行している。

■**特徴**：頭胴長 100–130 mm，尾長 90–120 mm，体重 25–55 g 程度。大型のトガリネズミで、背面は灰色または黒褐色。おもに渓流域に生息する。魚類、水生昆虫などを食べ、川岸の土中にトンネル状の巣穴を作る。溪流内の石の上で溜め糞がみられ、飼育観察などから縄張りを持つと考えられている。

■**分布** 県内：岩美町、八頭町、若桜町、智頭町、鳥取市、倉吉市、日南町。県外：本州、九州。日本固有種。

■**保護上の留意点**：堰堤やコンクリート護岸は、本種の移動を妨げ、餌資源の減少や繁殖場所の消失に繋がる。自然河岸を極力残すなどの保全対策が必要である。記録の少ない県中・西部を含め県下における本種の生息実態調査が早急に必要である。

■**文献**：12, 37, 38, 39, 67.

執筆者：岡田 純

ヒメヒミズ トガリネズミ形目モグラ科
Dymecodon pilirostoris True, 1886

鳥取県：情報不足 (DD)
環境省：—



撮影：澤島拓夫

■**選定理由**：大山夏山登山道で 1968 年に 4 個体 (3 雄, 1 雌) が記録されている。生息地の局限度が高いと考えられるが、詳細な現状が不明であるため今回は情報不足とした。

■**特徴**：非常に小型で、モグラとトガリネズミの中間の外形。尾が長い。頭胴長 70–84 mm，尾長 32–44 mm，後足長 12.8–15.2 mm，体重 8–14.5 g ほど。おもに昆虫類、クモ類、ミミズ類を捕食。春に繁殖し歯牙の摩耗による推定寿命は通常 2 年まで。近縁種ヒミズとの間に標高や地質による棲み分けが成立するとされ、高標高地や溶岩地帯に本種がみられる。大山では標高 1200 m 以下でヒミズ、1400 m 以上で本種が捕獲されている。

■**分布** 県内：鳥取県大山夏山登山道 (標高 1400–1600 m)。県外：本州中部以北と紀伊半島、四国、九州の一部の山岳地 (日本固有種)。

■**保護上の留意点**：山地自然林の保全とともに、現在の生息状況の実態調査が必要。

■**文献**：2, 44, 72, 73.

執筆者：横畑泰志

ミズラモグラ トガリネズミ形目モグラ科
Oreosaptor mizura (Günther, 1880)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)
環境省：準絶滅危惧 (NT)



若桜町春米氷ノ山登山道 2009.10.22 / 撮影：岡田珠美

■**選定理由**：分布の局限度が高い。

■**特徴**：頭胴長 80–100 mm 内外，尾長 20–25 mm 程度の小型のモグラでヒミズよりやや大きく、コウベモグラと比べるとはるかに小さい。体毛の色は灰色がかった黒褐色や黒色に近いものなど個体差がある。山地の森林に生息。遭遇度は非常に低く、全国的に生息地が局所化している。記録の多くは登山者により死体が発見されたものである。本種は環境省 RDB では 3 亜種に分けられており、本県の個体は分布域からヒワミズラモグラ *O. m. hiwaensis* (Imaizumi, 1955) の可能性が高いが、今後の標本の集積と DNA 分析の検討が必要である。

■**分布** 県内：氷ノ山 (若桜町) より 4 回、三朝町で 1 回、大山 (江府町) で 1 回確認。県外：本州 (広島県から青森県)。日本固有種。

■**保護上の留意点**：森林の保全、とくに林床の環境変化にも留意することが重要。県内での分布状況および生態は不明な点が多く、調査が必要。

■**文献**：3, 30, 43, 47, 58.

執筆者：岡田珠美・一澤 圭

アズマモグラ トガリネズミ形目モグラ科 *Mogera imaizumii* (Kuroda, 1957)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



撮影：横畑泰志

■**選定理由**：1955年、1957年に西部で記録があるが、その後、確認の報告はない。学術的な調査が行われていないことも未確認の大きな原因の一つと考えられ、現存の可能性もある。本種の生息記録は西日本では少なく、鳥取県内における生息は学術的にも、生物多様性の面でも貴重である。

■**特徴**：小型ないしは中型のモグラで、体の大きさは変異に富む。平野産の個体は大型、山地産、渓谷産のものは小型という傾向がある。

■**分布** 県内：西部。県外：本州中部以北、および紀伊半島南部を含む本州南部各地、四国、小豆島（日本固有種）

■**保護上の留意点**：全体では、低地から2000m程度までの山地で生息が確認されている。平地や山地の開発においては、本種生息の可能性も念頭においた取り組みが望まれる。また、県内での生息状況についての学術的調査に基づいた把握が必要である。

■**文献**：1, 2, 17, 72.

執筆：小林朋道

コキクガシラコウモリ 翼手目(コウモリ目) キクガシラコウモリ科 *Rhinolophus cornutus* Temminck, 1835

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



撮影：子安和弘（愛知学院大学）

■**選定理由**：鳥取県内に比較的広く分布しているが、ねぐらとして利用できる廃坑や廃線トンネルなどの劣化、隧道や海蝕洞の周辺の工事などにより個体数の減少が危惧される。

■**特徴**：頭胴長40mm内外、前腕長40mm内外、体重5-9g。外部形態はキクガシラコウモリに似るが、体重は1/2程度。鼻葉をもち、ここから超音波を出すのはキクガシラコウモリと同じだが下唇の裸出板の切れ込みは3本である。鳥取県では廃坑や廃線トンネル、隧道、海蝕洞などを利用している。

■**分布** 県内：岩美町、八頭町、若桜町、智頭町、三朝町、伯耆町。県外：北海道・本州・四国・九州。

■**保護上の留意点**：本種がねぐらとして利用している廃線トンネルなどの維持や隧道、海蝕洞周辺などの環境の配慮が必要である。

■**文献**：28, 31, 48, 62, 71.

執筆：小林朋道

キクガシラコウモリ 翼手目(コウモリ目) キクガシラコウモリ科 *Rhinolophus ferrumequinum* (Schreber, 1774)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



八頭町日田の廃坑内 2018.12 / 撮影：小林朋道

■**選定理由**：鳥取県内に広く分布しているが、分布の局限度は高いが、ねぐらとして利用できる廃坑や廃線トンネルなどの劣化、隧道や海蝕洞の周辺の工事などにより個体数の減少が危惧される。

■**特徴**：頭胴長70mm内外、前腕長60mm内外、体重25-35g。コキクガシラコウモリに類似しているがコキクガシラコウモリより体重、体長ともに2倍近く大きく、体色がコキクガシラコウモリの成獣は黄土色に近い褐色であるのに対しキクガシラコウモリは黒っぽい褐色であることが多い。下唇の裸出板の切れ込みは1本である。鳥取県では廃坑や廃線トンネル、隧道、海蝕洞などを利用している。

■**分布** 県内：鳥取市、智頭町、若狭町、八頭町、国府町、岩美町、三朝町、関金町、伯耆町、南部町。県外：北海道・本州・四国・九州。

■**保護上の留意点**：本種がねぐらとして利用している廃線トンネルなどの維持や隧道、海蝕洞周辺などの環境の配慮が必要である。

■**文献**：28, 45, 49, 59, 62.

執筆：小林朋道

ヒナコウモリ 翼手目(コウモリ目) ヒナコウモリ科
Vespertilio sinensis (Peters, 1880)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)
環境省：—



若桜町氷ノ山自然ふれあい館 2005.11.16 / 撮影：岡田珠美

■**選定理由**：生息地が限定され生息基盤が脆弱と考えられる。全国的には生息情報が増加しているが、県内では2カ所で確認されているのみ。

■**特徴**：頭胴長約70–80 mm, 前腕長50 mm内外, 体重15–30 gほど。中型で、暗褐色の体毛に白っぽい長毛が混じり、霜降り状に見える。本来は樹洞をねぐらとするが、岩の割れ目、橋げたの隙間や寺社の家屋など人工建造物を利用することもある。

■**分布** 県内：若桜町, 大山町。県外：北海道, 本州, 四国, 九州；朝鮮半島, 台湾, 中国東部, シベリア東部

■**保護上の留意点**：ねぐらとなる樹洞およびそれを取りまく森林環境の保全に加え、県内での生息状況の調査が必要。

■**文献**：51, 54, 56, 64.

執筆：岡田珠美・一澤 圭

ヒメホオヒゲコウモリ 翼手目(コウモリ目) ヒナコウモリ科
Myotis ikonnikovi Ognev, 1912

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)
環境省：—



若桜町春米東因幡林道 2008.8.11 / 撮影：岡田珠美

■**選定理由**：生息地の減少および分布の局限度が高い。北海道全域で確認されたため、環境省のレッドリストからは外れたが、県内での確認は少なく、氷ノ山の1カ所、中国地方でも広島県と鳥取県の2カ所で確認されているのみ。

■**特徴**：頭胴長40–50 mm, 前腕長30–40 mm, 体重4–8 gほど。小型のコウモリで体毛は黒褐色からこげ茶。本種を形態的特徴から5種に分類する考え方もあり、それに従うと本県で確認された個体はフジホオヒゲコウモリ *M. fujii* に該当する。枯死木や樹皮下、家屋、自然洞窟がねぐらとして知られている。山地から亜高山帯の主として自然林に生息する。生態は不明な点が多い。

■**分布** 県内：氷ノ山(若桜町)。県外：北海道, 本州(西日本ではごく局所的)；シベリア東部, 朝鮮半島, サハリン。

■**保護上の留意点**：ねぐらとなる樹洞およびそれを取り巻く自然林の保全に加え、県内での生息状況の調査が必要。

■**文献**：50, 57, 64.

執筆：岡田珠美・一澤 圭

モモジロコウモリ 翼手目(コウモリ目) ヒナコウモリ科
Myotis macrodactylus (Temminck, 1840)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)
環境省：—



撮影：小林朋道

■**選定理由**：鳥取県においては、廃坑や廃線トンネル、隧道などの利用が確認されているがその場所は限られており個体数も少ない。ねぐらにできる場所の環境条件が多いことが推察される。これらの利用場所の劣化と周辺の工事などにより一層の個体数の減少が危惧される。

■**特徴**：頭胴長50 mm内外, 前腕長35–40 mm, 体重10 g内外。体毛は灰黒褐色で腹面は背面より白い。腿部の体毛がとくに白い。水を好む習性があり、飛翔しながら水面から直接飲水することも知られている。

■**分布** 県内：鳥取市, 智頭町, 八頭町, 国府町, 南部町。県外：北海道・本州・四国・九州。

■**保護上の留意点**：本種がねぐらとして利用している廃線トンネルなどの維持やねぐら周辺への、工事なども含めた環境配慮が必要である。

■**文献**：7, 18, 28, 32, 40.

執筆：小林朋道

ヤマコウモリ 翼手目(コウモリ目) ヒナコウモリ科

Nyctalus aviator Thomas, 1911

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)



広島県庄原市比婆山 2011.8.7 / 撮影：上野吉雄

■**選定理由**：生息地の局限度が高いと考えられる。これまで日野郡に生息するという古い文献記録だけであったが、音声調査により、大山で生息が確認された。この大山の記録が位置情報を伴う唯一の記録。

■**特徴**：頭胴長 90–110 mm，前腕長 60 mm，体重 30–60 g 程度。日本の小型コウモリ類の最大種。体毛は明るい茶色で光沢を帯びる。大木の樹洞をねぐらとする。繁殖期以外は雌雄一緒に生活し、50–100 頭を超える大集団を作る。遠距離飛行が得意なことから遠方まで採餌に出かけると考えられている。

■**分布** 県内：日野郡，大山（大山町）。県外：北海道，本州，四国，九州；中国東部，朝鮮半島。

■**保護上の留意点**：ねぐらとなる大木の樹洞およびそれを取り巻く自然林の保全に加え、県内での生息状況の調査が必要。

■**文献**：10, 36, 53, 64.

執筆：岡田珠美・一澤 圭

ユビナガコウモリ 翼手目(コウモリ目) ヒナコウモリ科

Miniopterus fuliginosus (Hodgson, 1835)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



八頭町日田の廃坑内 2018.12 / 撮影：小林朋道

■**選定理由**：鳥取県内に比較的広く分布しているが、確認場所は、廃坑や廃線トンネル、隧道などで、自然劣化や人工的な環境破壊を受けやすい場所である。これらの確認場所の劣化と周辺の工事などにより個体数の減少が危惧される。

■**特徴**：頭胴長 60–70 mm，前腕長 50 mm 内外，体重 10–15 g。体毛は短く、こげ茶。洞窟性で、休息地では群れをつくる傾向がある。群れの大きさは数個体から数千個体以上までさまざまである。翼は長距離飛行に適した狭長型で、行動範囲が広い。

■**分布** 県内：鳥取市，智頭町，若桜町，八頭町，江府町，伯耆町，岩美町，南部町。県外：北海道・本州・四国・九州。

■**保護上の留意点**：本種がねぐらとして利用している廃坑や廃線トンネルなどの維持、ねぐら周辺での工事なども含めた環境配慮が必要である。

■**文献**：8, 19, 28, 33, 61.

執筆：小林朋道

テングコウモリ 翼手目(コウモリ目) ヒナコウモリ科

Murina hilgendorfi (Peters, 1880)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—



大山町大山三ノ沢 2021.10.9 / 撮影：原 竜也

■**選定理由**：森林伐採等による生息地が減少していると考えられている。県内の分布は局所的で生息基盤が脆弱と考えられる。

■**特徴**：頭胴長 60–70 mm，前腕長 40–45 mm，体重 8–15 g 程度。鼻孔がやや外側に向かって筒状に突出する。体毛は灰褐色で、銀色の刺毛が入る。大木の多い地域では樹洞をねぐらとするが、洞穴内でも見つかる。若桜町内では鉄筋コンクリート製アパートの壁に張り付いているのが確認された。

■**分布** 県内：若桜町，大山（大山町）。県外：北海道，本州，四国，九州；朝鮮半島，ロシア，中国，モンゴル，カザフスタン。

■**保護上の留意点**：ねぐらとなる樹洞およびそれを取り巻く森林環境の保全に加え、県内での生息状況の調査が必要。

■**文献**：52, 56, 64.

執筆：岡田珠美・一澤 圭

コテングコウモリ 翼手目(コウモリ目) ヒナコウモリ科
Murina ussuriensis Ognev, 1913

鳥取県：情報不足 (DD)
 環境省：—



若桜町氷ノ山東因幡林道 2008.8.11 / 撮影：岡田珠美

■**選定理由**：森林伐採等による生息地の減少・悪化が懸念される。県内では生息場所が数カ所確認されているが、十分な個体数の生息を裏付けるものではないため、情報不足としている。

■**特徴**：頭胴長 40–50 mm 内外，前腕長 30 mm 内外，体重 4–7 g 内外。鼻孔がやや外側に向かって筒状に突出する小型種である。体毛は黄土色から薄茶色。腿間膜は上面や後縁にも長い毛がある。樹洞の他，樹皮の隙間，家屋内，洞穴をめぐらし，しおれて丸まった葉の中で休むこともある。氷ノ山では建物の外壁で複数回見つかっている。

■**分布** 県内：氷ノ山（若桜町），智頭町，大山（大山町，江府町），日南町新屋。県外：北海道，本州，四国，九州，屋久島，対馬；シベリア東部および東北部，サハリン，千島列島，朝鮮半島。日本産をニホンコテングコウモリ *M. silvatica* Yoshiyuki, 1983 として別種とする意見もある。

■**保護上の留意点**：めぐらとなる樹洞，およびそれを取り巻く森林環境の保全に加え，県内での生息状況の調査が必要。

■**文献**：42, 56, 57, 64, 66.

執筆：岡田珠美・一澤 圭

オヒキコウモリ 翼手目(コウモリ目) オヒキコウモリ科
Tadarida insignis (Blyth, 1861)

鳥取県：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
 環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



鳥取市若葉台 / 撮影：小林朋道

■**選定理由**：本種は国内産食虫性コウモリのうちもっとも生活史が解明されていない種の一つで，国内でも定住する隠れ処は数カ所しか見つかっていない。鳥取県では，2006 年にはじめて 1 個体が発見されたのみで県内での生息状況はまだ不明である。

■**特徴**：耳介が大きく，尾が腿間膜より長く突出している。生息地としては，海上の小離島や市街地の建築物の中などが知られているが確認例が少なく，生息地も含めた生態的地知見はきわめて乏しい。県内では，鳥取市若葉台の公立鳥取環境大学の校舎内で発見されている。

■**分布** 県内：鳥取市。県外：北海道・本州・四国・九州。

■**保護上の留意点**：鳥取県内での確認は 1 例のみであるため，本種の生息・繁殖地が県内に存在するかどうか判断できない。今後の調査が望まれる。

■**文献**：9, 23, 34, 35.

執筆：小林朋道

ニホンザル 霊長目(サル目) オナガザル科
Macaca fuscata (Blyth, 1875)

鳥取県：情報不足 (DD)
 環境省：—



若桜町で見られた群れ
 2007.10.22 / 写真提供：鳥取県鳥獣対策センター

■**選定理由**：1980 年代以降，鳥取市，八頭町，三朝町，日野町で群れの目撃が継続して報告されているが，氷ノ山から誘導されて八頭町に定着した餌付け個体群 1 群（約 100 頭）を除き，ハッキリとした群れは確認されていない。しかし近年，ハナレザルは県内各地でみられ，智頭町や鳥取市用瀬町，河原町では小規模な群れが確認され，被害も発生して追い上げや有害捕獲も実施されている。情報は増えているが，県内で保護すべき種であるかどうかの判断に十分な情報が不足しているため DD とした。

■**特徴**：10～80 頭程度の群れで山林に生息し，果実や木の芽，昆虫などを食べる。オスは，ハナレザルとして単独で生活することがある。

■**分布** 県内：鳥取市（鹿野町），八頭町，三朝町，日野町など。県外：本州，四国，九州，屋久島（日本固有種）。

■**保護上の留意点**：全国的には中山間地の過疎化などに伴い人里での採食個体が増加して生息数が増加，分布も拡大傾向にある。県内での被害額は多くないが，放置果樹やクズ野菜の撤去などの農地管理と出現個体の山への追い上げの推進，生息状況の把握が望まれる。

■**文献**：5, 25, 69.

執筆：西 信介

ニホンリス 齧歯目(ネズミ目) リス科

Sciurus lis Temminck, 1844

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)



授乳中のメス 八頭町 2015.4.15 / 撮影：井上牧雄

■**選定理由**：おもな生息環境である里山から山地にかけてのアカマツとナラ類等の混交林が減少しており、注意が必要である。

■**特徴**：頭胴長 20 cm 内外，尾長 15 cm，体重 300 g 弱。背は，夏毛では赤褐色，冬毛では灰褐色をおび，耳先にふさ毛が生じる。腹部は 1 年を通して白色。昼行性で，樹上や地上でおもに植物を摂食する。常緑針葉樹等の樹上に球状の巣を作り，休息や繁殖に用いる。

■**分布** 県内：里山から山地のマツ林に多い。県東部を中心に中部，西部まで生息が確認されている。日野川以西は少ないとされていたが，近年では，島根県境近くまで複数の痕跡が確認されている。県外：本州，四国。日本固有種

■**保護上の留意点**：完全な森林性哺乳類で，ある程度の広さの森林が必要。孤立林には生息しないので，コリドー等で連続した森林を確保すること，生息適地であるマツ林の保全が重要。

■**特記事項**：環境省版では「ニホンリス中国地方地域個体群」で LP として掲載。

■**文献**：13, 41, 63.

執筆：西 信介

ニホンモモンガ 齧歯目(ネズミ目) リス科

Pteromys momonga Temminck, 1844

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



氷ノ山 2010.5.1 / 撮影：岡田 純

■**選定理由**：分布が局地的で個体数が少ない。伐採や林道等によって生息地の縮小，分断化が起きていると考えられる。

■**特徴**：頭胴長 15–20 cm，尾長 12 cm 内外。尾は扁平で，前後肢の間にある飛膜を使って飛ぶ。夜行性で目が大きい。樹洞をねぐらとし，樹木の葉，樹皮，果実等を食べる。春に 2–6 の仔を産む。巣箱を設置すると利用したり，民家に入り込むこともある。

■**分布** 県内：若桜町，智頭町，八頭町の山地森林。県外：本州，九州，四国（日本固有種）。

■**保護上の留意点**：生息情報が少ないため，伐採や林道建設に伴う保全対策がほとんど行われていない。生息地の分断化による繁殖移動や分散への影響が懸念される。生息する森林の保全と生息実態調査が望まれる。

■**文献**：24, 26, 27, 46, 55.

執筆：岡田珠美・岡田 純

ムササビ 齧歯目(ネズミ目) リス科

Petaurista leucogenys (Temminck, 1827)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



広島県 2016.6.6 / 撮影：保井 浩

■**選定理由**：鳥取県では 1958 年以降たしかに記録としては 8 件程度である。県内の生息地は多くないと考えられ，今後，注意して見守るべき種として準絶滅危惧種とした。

■**特徴**：頭胴長 40 cm 内外，体重 700–1100 g。飛膜をもち，木々の間を滑空して移動する。夜行性で昼間は樹洞巣などで休息するため，樹洞ができやすい大径木がある森に生息しやすい。家屋の屋根裏や戸袋に巣をつくることもある。

■**分布** 県内：東部，中部，西部。県外：北海道と沖縄を除く全都道府県（日本固有種）。

■**保護上の留意点**：学術的な調査などによる生息地の確認が望まれる。低標高地の大径木が残る天然林や二次林は生息地になる可能性があるため，できるだけ保存すべきであろう。

■**文献**：4, 20, 22.

執筆：小林朋道

ヤマネ 齧歯目(ネズミ目) ヤマネ科
Glirulus japonicus (Schinz, 1845)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)
環境省：—



江府町御机でスギ伐採中に落下、大山自然歴史館で一時保護された個体 2019.12.25 / 撮影：矢田貝繁明

- 選定理由**：近年の確認記録は大山および県東部の山地森林に限定され、生息適地の減少も懸念される。
- 特徴**：頭胴長 7-8 cm 内外。体は淡褐色で背面正中に 1 本の黒い縦すじがある。森林内の樹上で活動し、昆虫や木の実、花などを食べる。夜行性で日中は樹洞や樹幹の隙間、小鳥用の巣箱などにひそむ。同様の場所を繁殖用の巣にも利用する。冬季は体温を下げ、仮死状態で冬眠する。
- 分布** 県内：大山では 1960 年代に 3 件が記録されて以来、長らく確認されていなかったが、2012 年以降、比較的広範囲で多くの個体が確認されている。県東部では氷ノ山を中心に、扇ノ山、八頭町、智頭町、鳥取市国府町。その他、1980 年代に倉吉市関金町の製材所で見つかった例がある。県外：本州、四国、九州、隠岐島後。日本固有種。
- 保護上の留意点**：隠れ家や繁殖巣用に、樹洞や類似の環境を確保できる森林環境を保全することが重要。県内での生息状況の調査が望まれる。
- 特記事項**：国の天然記念物 (1975 年指定)。
- 文献**：11, 29, 68, 70.

執筆者：一澤 圭

ニホンオオカミ 食肉目(ネコ目) イヌ科
Canis lupus hodophilax Temminck, 1839

鳥取県：絶滅 (EX)
環境省：絶滅 (EX)



ニホンオオカミ下顎骨 (青谷上寺地遺跡) / 撮影：井上貴央

- 選定理由**：鳥取市青谷町青谷上寺地遺跡から下顎骨などが出土しており、かつて鳥取県に生息していたのは確実である。
- 特徴**：頭胴長は 1 m 20 cm 程度でノイヌよりひとまわり大きい。山林や原野に生息し、シカやノウサギを捕食。
- 分布** 県内：少なくとも明治以降の確実な生息記録はない。県外：かつては本州、四国、九州に広く分布していたが、1905 年に、奈良県の東吉野村で捕獲されて以来、記録はない。
- 特記事項**：日野郡江府町にはヒトがオオカミにおそわれたという史実があるが、本当にオオカミであるのかどうかは確認できない。
- 文献**：16.

執筆者：井上貴央

ニホンイタチ 食肉目(ネコ目) イタチ科
Mustela itatsi (Temminck, 1844)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)
環境省：—



南部町鴨部 2014.11.19 / 撮影：桐原佳介

- 選定理由**：2001 年以降、県内での本種の確認情報はごくわずかである。学術的な調査が行われていないことも情報が少ない原因の一つと考えられるが、外来種のチョウセンイタチの繁殖に伴う本種の生息数の減少が現在も続いている可能性がある。
- 特徴**：頭胴長は雌 20 cm 内外、雄 32 cm 内外。全身茶から山吹色で、額中央部から鼻境部にかけて褐色の斑紋がある。チョウセンイタチより小型で尾が頭胴長との比率で短い。
- 分布** 県内：若桜町、八頭町、鳥取市、北栄町など。県外：北海道・本州・四国・九州 (日本固有種)。
- 保護上の留意点**：チョウセンイタチの山間部への侵入は起こりにくいと考えられており、餌となるネズミ類や甲殻類などが生息できる自然度の高い山地・河川の保全が本種の保護につながると考えられる。
- 文献**：6, 21, 60.

執筆者：小林朋道

ニホンカワウソ 食肉目(ネコ目) イタチ科 *Lutra lutra nippon* Imaizumi & Yoshiyuki, 1989

鳥取県：絶滅 (EX)

環境省：絶滅 (EX)



ニホンカワウソ頭蓋骨（青谷上寺地遺跡）／
撮影：井上貴央

■**選定理由**：米子市目久美遺跡，青谷町青谷上寺地遺跡から頭蓋骨や下顎骨が出土しており，かつて鳥取県に生息していたのは確実である。

■**特徴**：体長 70 cm ほどで，尾長は 40–50 cm ほどある。全体に細長く，体毛は茶褐色である。川の中流の溪流から沿岸部，および離島の河川の下流に生息し，夜行性である。エビ，カニ，小魚を捕食するほか，ノネズミ類を捕食していると推測されている。

■**分布** 県内：少なくとも明治以降の確実な生息記録はない。県外：かつては北海道（北海道産は別亜種），本州，四国，九州に広く分布しており，明治・大正年間には大量に捕獲された記録がある。その後，河川環境の変化とともに次々に数が減り，瀬戸内海や高知県南岸にごく少数が生息するにすぎないと考えられている。1979 年に高知県で目撃されたのが最後で，それ以降は発見されていない。

■**特記事項**：鳥取県立博物館には古い剥製標本があるが，産地は不明である。

■**文献**：15, 16.

執筆：井上貴央

ニホンアシカ 食肉目(ネコ目) アシカ科 *Zalophus japonicus* (Peters, 1866)

鳥取県：絶滅 (EX)

環境省：絶滅危惧 IA 類 (CR)



ニホンアシカ下顎骨（鳥取市青谷町青谷上寺地遺跡）／
撮影：井上貴央

■**選定理由**：鳥取市青谷町青谷上寺地遺跡から下顎骨や前肢の骨などが出土しており，かつて鳥取県に生息していたのは確実である。

■**特徴**：体長は 1 m 50 cm–2 m 50 cm 程度。雄は雌より大きく，成獣になると矢状稜が発達し，頭頂部にこぶができる。沿岸や離島の岩礁に生息。隠岐や竹島では海食洞を利用していたことが分かっている。イカや魚類を捕食。繁殖期にはハレムを形成する。

■**分布** 県内：少なくとも明治以降の確実な生息記録はない。県外：北海道から鹿児島まで太平洋側や日本海側のほとんどの海域に生息していたが，現在では姿を見ない。

■**保護上の留意点**：鳥取県内では現在生息の可能性はないが，朝鮮半島などの近隣にまだ生息していて，漂着する可能性があるので注意を要する。

■**特記事項**：島根県竹島では明治・大正年間に大量の捕獲が行われた事実があり，1975 年までは生息が確認されていた。その後 2009 年に竹島（韓国名：独島）でアシカが目撃談が相次いだとのニュース情報があり，記事内容からニホンアシカである可能性が高いと思われる。これまでアシカのカリフォルニアアシカの亜種と考えられてきたが，現在は独立種として分類されている。

■**文献**：14, 16, 65.

執筆：井上貴央

ニホンカモシカ 偶蹄目(ウシ目) ウシ科 *Capricornis crispus* (Temminck, 1845)

鳥取県：絶滅 (EX)

環境省：—



明治時代に八頭郡若桜町で捕獲されたニホンカモシカの毛皮／
撮影：井上貴央

■**選定理由**：鳥取市青谷町青谷上寺地遺跡から下顎骨，肩甲骨などが出土しており，明治時代の毛皮が確認されていることから，かつて鳥取県に生息していたのは確実である。

■**特徴**：体高 65–80 cm。顕著な性的二型は認められず，雄雌ともに，黒色の短い円錐型の角を有する。体色は灰白色～黒褐色。低山帯から亜高山帯の落葉広葉樹林や混交樹林に生息する。草や木の葉・芽のほか，秋・冬季には落葉も食べる。

■**分布** 県内：明治時代に八頭郡若桜町の山中で狩猟された毛皮が残っている。県外：東北，中部地方，紀伊半島，四国や九州の一部に生息する。中国地方では絶滅したと考えられている。

■**特記事項**：国の特別天然記念物（1955 年指定）。

■**文献**：16.

執筆：井上貴央

■参考文献 哺乳類

- 阿部 永 (2005) アズマモグラ. p.23. In: 自然環境研究センター (編) 日本の哺乳類 (改訂版). 東海大学出版会 (東京), 206 pp.
- 阿部 永・横畑泰志 (編) (1998) 食虫類の自然史. 比婆科学教育振興会 (庄原市), 391pp.
- 浅井三礼 (1991) 氷ノ山で採集されたミズラモグラ. 比婆科学, 150: 46.
- 馬場 稔 (2010) ムササビ. pp. 345–360. In: 野生動物保護学会 (編) 野生動物保護の事典. 朝倉書店 (東京), 782 pp.
- 馬場 稔 (2010) ニホンザル. pp. 345–346. In: 野生動物保護学会 (編) 野生動物保護の事典. 朝倉書店 (東京), 782 pp.
- 土肥昭夫 (2010) イタチ. pp. 385–386. In: 野生動物保護学会 (編) 野生動物保護の事典. 朝倉書店 (東京), 782 pp.
- 船越公威 (1996) 洞窟性コウモリ. pp. 40–43. In: 日高敏隆 (監修) 日本動物百科 第1巻 哺乳類 I. 平凡社 (東京), 203 pp.
- 船越公威 (2005) ユビナガコウモリ. pp. 48–49. In: コウモリの会 (編) コウモリ識別ハンドブック. 文一総合出版 (東京), 68 pp.
- 船越公威・山本貴仁 (2001) 高知県蒲葦島からのオヒキコウモリ *Tadarida insignis* 生息地の新発見. 哺乳類科学, 41: 87–92.
- 日野郡科学教育研究会・日野教協教育部理科班 (編) (1955) 脊椎動物門 1. 哺乳類. 「日野郡生物誌」, pp. 15–16.
- 一澤 圭 (2012) ヤマネ. p. 30. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
- 井上牧雄 (2002) カワネズミ. p. 25. In: レッドデータブックとっとり (動物).
- 井上牧雄 (2002) ニホンリス. p. 30. In: レッドデータブックとっとり (動物).
- 井上貴央 (1995) 日本海竹島のニホンアシカその 2. 捕獲頭数の変遷. 海洋と生物, 17: 41–46
- 井上貴央 (1986) 目久美遺跡より検出された動物遺存体について. pp. 129–138. In: 加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書. 米子市教育委員会
- 井上貴央・松本充香 (2002) 青谷上寺地遺跡から検出された動物遺存体について. pp. 470–480. In: 鳥取県教育文化財団調査報告書 74『青谷上寺地遺跡 4』. 鳥取県教育文化財団.
- 巖城 隆 (2002) アズマモグラ. p.26. In: レッドデータブックとっとり (動物).
- 巖城 隆 (2002) モモジロコウモリ. p. 28. In: レッドデータブックとっとり (動物).
- 巖城 隆 (2002) ユビナガコウモリ. p. 29. In: レッドデータブックとっとり (動物).
- 片岡智徳 (2002) ムササビ. p. 31. In: レッドデータブックとっとり (動物).
- 片岡智徳 (2002) ニホンイタチ. p. 33. In: レッドデータブックとっとり (動物).
- 川道武男 (2002) ムササビ. pp. 78–83. In: 日本動物大百科 第1巻 哺乳類 I (日高敏隆監修). 平凡社 (東京), 203 pp.
- 小林朋道 (2007) 先生, 巨大コウモリが廊下を飛んでいます!. 築地書館 (東京), 182 pp.
- 小林朋道 (2011) 鳥取県智頭町芦津森林で見られた樹上性齧歯類や鳥類の巣箱の使い分け. 鳥取県立博物館研究報告, 48: 95–101.
- 小林朋道 (2012) ニホンザル. p. 28. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
- 小林朋道 (2013) ニホンモモンガ *Pteromys momonga* 成獣による巢内同居の誘発. 鳥取県立博物館研究報告, 50: 55–59.
- 小林朋道 (2014) 巣箱利用から見た鳥取県芦津溪谷におけるニホンモモンガ, ヤマネ, ヒメネズミの生息場所選択性. 鳥取県立博物館研究報, 51: 1–6.
- 小林朋道 (2018) 鳥取県内における洞窟性コウモリの生息状況. 鳥取県立博物館研究報告, 55: 1–7.
- 小林 徹 (2006) 智頭町 (暖温帯低標高) におけるヤマネ (げっ歯目ヤマネ科) の記録. 山陰自然史研究, 2: 34–35.
- 國本洗紀 (2006) ミズラモグラの鳥取県三朝町からの初記録. 山陰自然史研究, 1: 26.
- 前田喜四雄 (2005) コキクガシラコウモリ. p.31. In: 自然環境研究センター (編) 日本の哺乳類 (改訂版). 東海大学出版, 206 pp.
- 前田喜四雄 (2005) モモジロコウモリ. p. 36. In: 自然環境研究センター (編) 日本の哺乳類 (改訂版). 東海大学出版, 206 pp.
- 前田喜四雄 (2005) ユビナガコウモリ. p. 56. In: 自然環境研究センター (編) 日本の哺乳類 (改訂版). 東海大学出版, 206 pp.
- 前田喜四雄 (2005) オヒキコウモリ. p. 62. In: 自然環境研究センター (編) 日本の哺乳類 (改訂版). 東海大学出版, 206 pp.
- 前田喜四雄 (2010) オヒキコウモリ. p. 342. In: 野生動物保護学会 (編) 野生動物保護の事典. 朝倉書店 (東京).
- 美田 正 (1964) 生物の種類と生態. pp. 1–56. In: 鳥取郷土研究会 (編) 郷土の自然と社会.
- 森本祈恵・小林朋道 (2020) カワネズミ *Chimarrogale platycephala* における溜め糞行動の生物学的特性. 山陰自然史研究, 16: 35–44.
- 森本祈恵・小林朋道 (2020) カワネズミ *Chimarrogale platycephala* は水中でスクーバタンクを利用している可能性がある. 山陰自然史研究, 16: 45–46.
- 森本祈恵・小林朋道 (2021) カワネズミを見てみたい! 水にもぐる銀色の小動物の研究. くもん出版 (東京), 144 pp.
- NPO 法人なんぶ里山デザイン機構 (2017) ユビナガコウモリをはじめとするコウモリ類の生息地環境保全事業報告, 85 pp.
- 西 信介 (2012) ニホンリス. p. 29. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
- 野津幸夫 (2014) 大山 (鳥取県) で観察したコウモリ類 2 種. 山陰自然史研究, 10: 29.
- 野津幸夫・東常哲也・岡本宗祐・増本育子 (2013) 鳥取県におけるミズラモグラの新産地. ホシザキグリーン財団研究報告, 16: 95–101.
- Ohdachi, S.D., Ishibashi, Y., Iwasa, M. A., Fukui, D. & Saitoh, T.(eds.) (2015) The Wild Mammals of Japan, Second Edition. Shokadoh Book Sellers, Kyoto, 506 pp.

45. 岡田 純・岡田珠美・一澤 圭 (2010) 鳥取県西部からのキクガシラコウモリの新産地. 山陰自然史研究, 5: 63-64.
46. 岡田珠美 (2008) 鳥取県氷ノ山におけるホンドモモンガの記録. 山陰自然史研究, 4: 56.
47. 岡田珠美・一澤 圭 (2012) ミズラモグラ. p. 24. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
48. 岡田珠美・一澤 圭 (2012) コキクガシラコウモリ. p. 25. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
49. 岡田珠美・一澤 圭 (2012) キクガシラコウモリ. p. 25. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
50. 岡田珠美・一澤 圭 (2012) ヒメホオヒゲコウモリ. p. 26. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
51. 岡田珠美・一澤 圭 (2012) ヒナコウモリ. p. 26. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
52. 岡田珠美・一澤 圭 (2012) テングコウモリ. p. 27. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
53. 岡田珠美・一澤 圭 (2012) ヤマコウモリ. p. 27. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
54. 岡田珠美・岡田 純 (2006) 氷ノ山におけるヒナコウモリの初記録. 山陰自然史研究, 2: 39-40.
55. 岡田珠美・岡田 純 (2012) ニホンモモンガ. p. 29. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
56. 岡田珠美・岡田 純・一澤 圭 (2008) 鳥取県におけるテングコウモリ属2種の初記録およびヒナコウモリの2例目の記録. 鳥取県立博物館研究報告, 45: 7-9.
57. 岡田珠美・岡田 純・上野吉雄・内藤順一 (2010) 鳥取県若桜町氷ノ山からのヒメホオヒゲコウモリの初記録. 山陰自然史研究, 5: 62-63.
58. 岡田珠美・鶴崎展巨 (2003) 氷ノ山におけるミズラモグラの新記録. 山陰自然史研究, 1: 26.
59. 佐野 明 (2005) キクガシラコウモリ. pp.14-15. In: コウモリの会 (編) コウモリ識別ハンドブック. 文一総合出版 (東京), 68 pp.
60. 佐々木浩 (1996) ニホンイタチとチョウセンイタチ. pp. 128-131. In: 日本動物大百科第1巻 哺乳類 I (日高敏隆監修). 平凡社 (東京), 203 pp.
61. 澤田 勇 (1994) 日本のコウモリ洞総覧. 自然誌研究雑誌, 2/3/4: 53-80.
62. 澤田 勇 (1996) 「日本のコウモリ洞総覧」こぼれ話 -鳥取県の巻-. 鳥取生物, 29: 1-5.
63. 田村典子・松尾 龍平・田中 俊夫・片岡 友美・広瀬 南斗・富士本 八央・日置 佳之 (2007) 中国地方におけるニホンリスの生息状況. 哺乳類科学, 47: 231-237.
64. 上野吉雄・畑瀬 淳・原 竜也・石井秀雄・岡田 純・岡田龍河・松田裕太・鶴崎展巨 (2022) 鳥取県大山のコウモリ相. 高原の自然史, 21: 51-58.
65. 鬱陵 = 国民日報クッキーニュース (2009) 独島アシカ 33年ぶりに姿現す 2009年3月13日配信.
66. 山田 勝 (2017) 鳥取県八頭郡智頭町でコテングコウモリを確認. しぜんくらしき, 101: 4.
67. 山本賢二 (1993) ニホンカワネズミ. pp.6-7. In: 鳥取県のすぐれた自然 (動物).
68. 山本賢二 (1993) ヤマネ. pp. 10-11. In: 鳥取県のすぐれた自然 (動物).
69. 山本賢二 (2002) ニホンザル. p. 29. In: レッドデータブックとっとり (動物).
70. 山本賢二 (2002) ヤマネ. p. 31. In: レッドデータブックとっとり (動物).
71. 山本輝正 (2005) コキクガシラコウモリ. pp.16-17. In: コウモリの会 (編) コウモリ識別ハンドブック. 文一総合出版 (東京), 68 pp.
72. 横畑泰志 (2010) 食虫 (モグラ) 目. pp. 334-339. In: 野生生物保護学会 (編) 野生生物の保護の事典. 朝倉書店 (東京), 782 pp.
73. 吉田博一 (1969) 大山の小哺乳類に関する二, 三の知見. 哺乳動物学雑誌, 4: 127-130.